

リ、以テ其古クヨリ世ニ行ハレタルモノナルヲ見ルベシ、
〔西鶴織留一〕古帳よりハ十八人口

今是のおかたの常住の風俗を見るに、略中 爐燧にむらさきぶとんをかけ、茶繻子の引敷、延の鼻紙に壺打のやうじ。取添へ、たばこの火に、伽羅を焼かけ、せんじ茶を、臺天目にてはこばせ、手もとに源氏物語、いたづらに氣を移す事を、年中の仕事にして、略下

〔嬉遊笑覽二中〕西鶴織留に、傾城が人の妻となりたる處に、延の鼻紙に壺打のやうじ取添云々、その繪に、今のふさやうじの形をかけり、食後には必是を用ひたる也、

〔男色大鑑四〕詠めつゞけし老木の花の頃

今年主水島玉は六十三、半右衛門田豊は六十六まで昔に替らぬ心づかひ、二人共に一生女の顔をも見ず、此年迄世を過しは、是戀道少人を好る鑑ならん、今もまだ主水を若年のごとく思ひつづけて、黒き筋なき薄鬢に、花の露をそゝぎ、卷立に結なすもをかし、氣をとめて見しに、此人は角を入たるよしもなく、生付の丸額、是ぞかし、不斷も以前を忘れずして、壺打の楊枝、手ふれて齒を磨くなど、髭をぬき捨、玄らぬ人の見ては、かゝる分とはよもや思ふまじ、

〔人倫訓蒙圖彙五〕楊枝師 打。楊枝。平。楊枝。品々あり、栗田口の猿屋ハ、玉串村の者なるによりて、其名高し、

〔嬉遊笑覽二中〕打やうじと云ひしは、今のふさやうじなり、平やうじ、今文政もあり、平めにし、て、少しそりたるなり、茶菓子などに二本添て箸に用むかしのは、大かた今の辨當箸よりも長しと見ゆ、

〔諸艶大鑑三〕一言聞身行邊
道行づくしの淨瑠利本、皮付の大楊枝、喜三郎が琢砂をたしなみ、略下